

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2023年8月31日(木) 14:40 ~ 16:40 | 会場 RY202 良心館2階 R Y 2 0 2 番教室

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導—これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち—

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）

指定討論者：末永 祐介（熊本大学）

本シンポジウムでは、初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」、2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」、をテーマに検討を進めてきた。特に昨年のシンポジウムでは、新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された。その上で3年目は、多角的領域のエビデンスを踏まえたうえでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして、まとめとなるシンポジウムを開催する。

本シンポジウムでは、これからの保健体育の教育活動として、これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい。

[学校保健体育-SC-1] アクティブ チャイルド プログラム（ACP）を用いた体育実践とその効果
準備運動の見直しで楽しさと基礎運動能力の向上を目指す

*春日 晃章¹ (1. 岐阜大学)

[学校保健体育-SC-2] 長距離走授業に「楽しさ」を埋め込む可能性と限界

*木島 章文¹ (1. 山梨大学)

[学校保健体育-SC-3] 生成系の人工知能時代における「身体」の再価値化と保健体育の大改革

*松田 恵示^{1,2} (1. 立教大学、2. 東京学芸大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導－これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち－

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）

指定討論者：末永 祐介（熊本大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

本シンポジウムでは、初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」、2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」、をテーマに検討を進めてきた。特に昨年のシンポジウムでは、新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された。その上で3年目は、多角的領域のエビデンスを踏まえたいうでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして、まとめとなるシンポジウムを開催する。

本シンポジウムでは、これからの保健体育の教育活動として、これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい。

[学校保健体育-SC-1] アクティブ チャイルド プログラム（ACP）を用いた 体育実践とその効果

準備運動の見直しで楽しさと基礎運動能力の向上を目指す

*春日 晃章¹ (1. 岐阜大学)

<演者略歴>

金沢大学大学院教育学研究科修了後、岐阜聖徳学園大学短期大学部を経て、2007年より岐阜大学教育学部に勤務。博士（医学）。専門は発育発達学、測定評価学。学校法人春日学園の理事長も務め、4つの幼稚園・保育園の経営とJSPO-ACPを用いた保育や学校体育で使える運動プログラムの開発や普及、検証にも携わっている。

我が国の子どもの体力や運動能力は年々低下傾向を示し、コロナ禍においてさらに大きく低下するとともに、二極化傾向も示され、運動・スポーツへの興味なし群も増加している。社会状況の変化により放課後の身体活動が困難な現在において、体育実技の時間が唯一、皆が身体活動に従事できる時間と言っても過言ではない。しかし、楽しさを感じさせ、一定の身体活動量を確保するような体育が行われているのか、本当に生涯スポーツに繋がる体育なのか疑問である。もちろん、指導要領に沿って授業展開することが求められるため、教師の自由度も少ない。そこで、授業始めの準備運動に注目してみた。全国的に体育授業の準備運動としてランニング、徒手体操、単元に関わる動きなどがこれまで主流に実施されている。この部分の取り組みに JSPO-ACPを参考にした運動遊び要素や基礎運動能力向上要素を盛り込んだプログラムを用いながら体育を実践し、その効果を多角的に検証している。

本シンポジウムでは、これまでの取り組みや効果検証の結果を示しながら、今の時代に合った体育授業のあり方について、また、今後の指導要領のあり方について論究したい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ーこれからの保健体育が目指す教育と研究のかたちー

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）

指定討論者：末永 祐介（熊本大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

本シンポジウムでは、初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」、2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」、をテーマに検討を進めてきた。特に昨年のシンポジウムでは、新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された。その上で3年目は、多角的領域のエビデンスを踏まえたいえでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして、まとめとなるシンポジウムを開催する。

本シンポジウムでは、これからの保健体育の教育活動として、これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい。

[学校保健体育-SC-2]長距離走授業に「楽しさ」を埋め込む可能性と限界

*木島 章文¹ (1. 山梨大学)

<演者略歴>

筑波大学体育科学研究科を単位取得満期退学し、大阪体育大学・福山平成大学を経て、2011年より山梨大学教育学部に勤務。博士（体育科学）。所属する専門領域は体育心理学で主な研究興味は対人協応科学。最近の業績例は<https://www.nature.com/articles/s41598-022-16703-4>。左投げ・左打ち。

3年目を迎える応用部会の取り組みをまとめ、部会員が実際に取り組んだ研究・教育活動を示したい。その行程は以下の通りである。1) 初年度のシンポジウムに提示された長距離走の授業の問題を取り上げ、そこに「主体的・対話的な深い学び」を誘発する機能を埋め込んだ授業例を示す。2) 運動心理学の伝統的理論であるスキーマ理論に基づいてその教育効果を検証した結果を示す。3) 同シンポジウムにて示される「楽しさを感じさせ、一定の身体活動量を確保するような体育（春日）」、「身体を柱とした教育活動を支えるスコープ（松田）」に内包される「楽しさ」を、授業に埋め込む可能性と限界を提案する。

こうした活動の一例を示しながら、今後の教育・研究方針：本部会が掲げる「実践のエビデンス」の紡ぎ方に具体性をもたせることを目的として発表を行う。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導ーこれからの保健体育が目指す教育と研究のかたちー

コーディネーター：柏木 悠（専修大学）

指定討論者：末永 祐介（熊本大学）

2023年8月31日(木) 14:40 ～ 16:40 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

本シンポジウムでは、初年度に「学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離」、2年目には「次世代学習指導要領作成に向け必要なエビデンスとは（多角的領域からのエビデンスの確認）」、をテーマに検討を進めてきた。特に昨年のシンポジウムでは、新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性が示唆された。その上で3年目は、多角的領域のエビデンスを踏まえたうえでの「これからの保健体育が目指す教育と研究のかたち」をテーマとして、まとめとなるシンポジウムを開催する。

本シンポジウムでは、これからの保健体育の教育活動として、これまでの概念に捉われない新しいカタチについて議論を進めたい。

[学校保健体育-SC-3]生成系の人工知能時代における「身体」の再価値化と保健体育の大改革

*松田 恵示^{1,2} (1. 立教大学、2. 東京学芸大学)

<演者略歴>

現在、立教大学特任教授、東京学芸大学理事・副学長、日本OECD共同研究日本側代表者、東京都教育ビジョン第5次検討委員会委員、教育再生実行会議委員、中央教育審議会臨時委員などを歴任し、教育全体の政策策定に関わりつつ、体育、スポーツ、遊びについての実践と社会学的・文化論的研究も並行して行っている。

多角的領域のエビデンスを踏まえたこれまで2年間のシンポジウムは、生成系の人工知能が社会変革の引き金になろうとしている極めて変化の激しい現代社会において、新しい意味での「身体」を柱とした子どもたちをめぐる教育活動の必要性と実践レベルでの評価の問題が大きいことが示唆されている。

そこで、シンポジウムでの成果をもとに、これからの保健体育を「身体を楽しむこと」「身体を護り育てること」「身体を知り活用すること」の3つのスコープを設ける領域横断的な教育活動として、学会サイドから新しく再構築することを提案してみたい。また、現場、研究、政策が三位一体となって実践を作り出す営みへと保健体育を改革するとともに、それを支えその実践のエビデンスを支える研究(学会活動)の新しいカタチをシンポジウムで検討してみたい。